

平和を願う

吉澤 侑里

私は、広島市平和記念式典派遣団の一員として、日高市の六年生全員で折った千羽づるを、原爆の子の像^レにささげてきました。広島市の平和記念資料館では、七十三年前の八月六日にどんな出来事があったのかを学び、平和記念式典では原子爆弾が投下された午前八時十五分に合わせて平和を願い、黙とうをささげてきました。

一日目に行った平和記念資料館には、思わず目をおおいたくなるような写真や展示物がありました。強烈な破壊^{はかい}エネルギーを出す原子爆弾の爆風や熱線により、肌が炭のように真っ黒に焼かれて顔や性別が分からなくなっていた人間の写真や、ビンが変色し、とけてつぶれた物を触^{さわ}りました。また放射線の影^{えい}響^{きやう}で髪の毛が抜けたり、七十三年経った今でも、後^{こう}障害^{しょうがい}に苦しんでいる人がいることをはじめて知りました。

二日目の平和記念式典では、様々な国から人が集まり、午前八時十五分から一分間の黙とうをささげました。黙とうをしている間、ずっとな平和の鐘ひびがなり響ひびいていました。私は七十三年前の同じ時間に起きたことを、鐘の音をききながら想像してみました。思い浮かべたのは、焼けこげた街で人々が水を求めている、まっ黒の世界でした。鐘がなり終わり、目を開けると、きれいな青い空の下にたたずむ原爆ドームが見えました。私は、この青い空がずっとなとずっとな続いてほしいと強く思いました。

今回広島に行つて原爆の資料を見たり、語り部さんから直接、被爆体験を聞くことにより、戦争の悲惨さひさん、平和の尊とさを知ることができました。人の命をうばう戦争は、二度とあつてはならないし、したくありません。二日間で体験したことを多くの人に伝え、未来について一緒に話し合いたいと思います。貴重な体験をありがとうございました。